

卒業研究 題目 大学ソフトテニス選手における傷害に関する研究

英文題目 A study about injuries of the college soft tennis players

1 K 0 3 A 0 8 7 - 1

氏名 小林 昂夫

指導教員 主査 福林 徹 先生 副査 宮崎 正己 先生

〔緒言〕

ソフトテニスは日本で生まれ育った伝統ある大衆スポーツである。日本国内での愛好者数は500万人とも700万人ともいわれる。これは他のスポーツと比較しても極めて多い数字である。しかし、どのような傷害が起こりやすいのか、示されているものがほとんどない。また、傷害の予防には選手自身の意識も重要だと考えられるが、ソフトテニス選手の傷害への意識は高いといえないのが現状である。そして、傷害発生時に選手がどのような対処をするかを調査したものは見当たらない。

本研究は、傷害を受けた部位、およびそれに対する処置をアンケートで集計し、ソフトテニスにおいて受傷しやすい傷害の部位・種類、また傷害へ対する意識の高さを明らかにし、ソフトテニスを行う際の受傷しやすい傷害への予防法、受傷した際の対処法を確立することを目的とした。

〔対象および方法〕

関東学生ソフトテニス連盟所属の各大学体育会ソフトテニス選手1723人（男子1068人、女子655人）に対してアンケート調査を行い、うち有効な回答の得られた1047人（回収率60.8%）を対象とした。

アンケート調査項目は、自大学の所属部、性別、ポジション、現病歴（部位、期間、重症度、対処方法）、既往歴（部位、期間・時期、重症度、対処方法）で、原則として自己申告とした。受傷部位は頸部、肩、肘、手、腰、背部、膝、下腿、足首の9部位及びその他で、期間・時期については傷害別に記入を行った。期間、重症度は χ^2 検定を用い、それぞれの傾向が部位間で異なるかを検討した。男女比較、ポジション比較は χ^2 検定を用い、傷害全体および部位ごとに性差、ポジション差があるかを検討した。レベル別比較は二項検定を用い、傷害全体および部位ごとにレベル差があるかを検討した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

〔結果〕

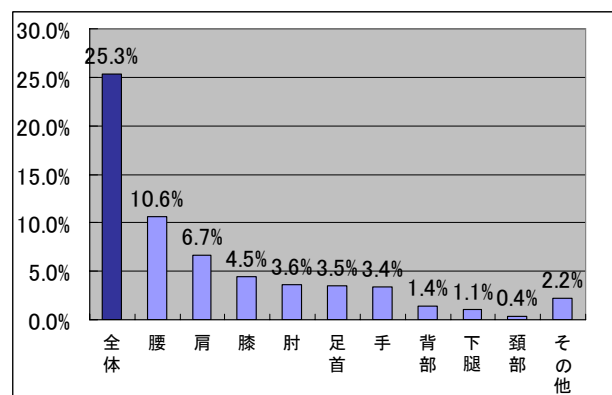
現病歴にて疼痛のある選手は265人（25.3%）おり、約4人に1人は何らかの痛みを抱えながらプレイをしていた。現病歴の傷害の部位は右図のようになった。期間では、1年以上の腰部傷害が多い傾向がみられた。重症度では、重症度1・2が大半を占めた。男女別では、女性の受傷率の方が高く、ポジション別では後衛、競技レベル別ではハイレベルプレイヤーの受傷率がそれぞれ高かった。また、

それぞれにおいて特に腰の受傷が多かった。受傷後の処置方法は「何もしていない」人が3割を超え、傷害を放っておくケースが多かった。

既往歴にて疼痛があった選手は452人（43.2%）おり、5人に2人は既往歴をもっていた。既往歴の傷害の部位の内訳は腰164人、肩128人、肘122人、足首100人、膝77人、手70人、下腿32人、背部19人、頸部8人、その他23人であった。受傷時期では、腰、膝、足首で最近でも受傷していた。重症度では、現病歴に比べて、重症度3の割合が増えていた。男女比較では、現病歴よりも女性の受傷率の割合が増えていた。また、男子では肩の受傷が多くみられた。ポジション別では全体的に後衛の受傷率が高かったが、腰において前衛の受傷率が上回っていた。レベル別では、ハイレベルプレイヤーの受傷率が高かった。受傷後の処置方法は、整形外科や接骨院・鍼・整体で治療をしている人が多くみられた。

〔考察〕

一番怪我が多いパターンは、1部から3部に所属しているハイレベルプレイヤーで、ポジションは後衛、性別は女性で、腰を受傷する場合であった。また、ソフトテニス選手はプレイに影響しないほどの痛み、または影響してもプレイできるほどの痛みならば自分でアイシングなどをするか、何も処置はしないでプレイし続け、テニスが痛くてできないほどに悪化してやっと整形外科や、接骨院、針、整体などに行き、治療が行いがちである。



〔結論〕

ソフトテニス選手の傷害、予防に対する意識の低さが明らかとなり、その予防方法、受傷後における処置方法の改善の必要性が示唆された。